

凝灰の箱庭

～愚弄される女探偵～

1

比久見野堅物

本作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件等とは一切関係ありません。
また、作中に登場する暴力的・性的な描写、または犯罪行為・非道徳的な行動については、
いかなる現実の行為も推奨・肯定するものではありません。
読者の方のご理解と自己判断の上で楽しみいただきますようお願いいたします。

■ 目次

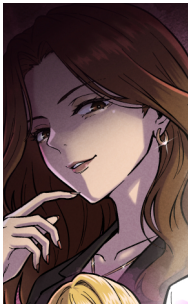
登場人物	4
序章	6
#1. 目覚め	15
#2. 連行	32
#3. 輸送	43
#4. 車内	56
#5. 邸宅	69
#6. 入浴	77

登場人物



■大杉麻帆 (おおすぎまほ 28 歳)

元警察官の探偵。身長 175cm という長身と筋肉質なプロポーションを持つ、ショートボニーテールのイケメン女子。正義感が強く負けず嫌いな性格。その性格が災いし小さな不祥事にも強いこだわりを見せてしまい、警察上層部と関係が悪化し 5 年で依願退職している。以後は亡き父の探偵事務所の屋号を継いで私立探偵をやっている。主に浮気調査などが中心だが、収入が安定しない為、大手興信所の下請けなども行っている。自罰的な一面から身体を鍛えている。



■高三野美代子 (たかみのみよこ 50 歳)

妖艶な雰囲気が漂う美魔女。やや細身のバイセクシャル。その聡明で艶やかな立ち振る舞いから政財界にも顔が利く。表の顔は名だたる有名企業の役員名簿に外部取締役として名を連ねる財界の重鎮。裏の顔は半グレたちを束ねる反社の女王。自分の作り出した環境の中で他人が右往左往する様を眺めるのが大好き。警察官時代の麻帆のことを知っており、いつか手に入れたと思っていた。



■轡田稔 (くつわだみのる 44 歳)

日焼けした肌に筋骨隆々のツープロックゴリラ。190cm はある大柄なナチュラル筋肉だるま。歯は全てセラミックに入れ替えており真っ白に輝いている。笑顔が好印象らしい。腕っぶしが強く、総合格闘技のアマチュア大会で優勝経験もある。人前で他人にマウンティングするのが大好き。



■地井義行 (ちいよしゆき 36 歳)

細身のメガネにばさばさの短髪、チンピラとは程遠い見た目の半グレ集団 DID の構成員。身長 167cm しかないのでややコンプレックスを持っている。陰湿で偏屈、変態的な趣味を持っており、半グレとして手にかけた女性を執拗に追い詰めるのがとても上手い。用心深いつもりらしいが所々で詰めが甘い。



■矢部晴瑠耶 (やべはれるや 20 歳)

華奢でやや童顔な金髪の男。身長は 171cm と地井より高い。ホストで半グレ集団 DID の構成員。そのどことなく幼さが残る顔と無邪気な言動と時折繰り出される甘い言葉が人気らしい。本名が昔からコンプレックスだったが、轡田がつけてくれた源氏名をととても気に入っている。余り頭が良くない。



■知来恵 (ちらいめぐみ)

搜索願が出されていたものの、何故か取り下げられてしまった女子大生。黒髪ストレートヘアで、私服時は地雷系ファッションを好んでいた。俗に言うびえん系メンヘラ女子。東京の繁華街へと遊びに行ったまま行方が分からなくなっており、今回麻帆に搜索するよう依頼された人物。

■阿久井修二 (あくいしゅうじ)

麻帆が警察官時代に告発しようとした上司。メタボ体型だがその下は筋肉。経費を水増し請求して私腹を肥やしていたが、もみ消された。

■古井佑人 (ふるいゆうと)

麻帆の父親の時から知り合い。大手興信所から私立探偵への仕事の斡旋などを行っている他、警察との繋がりも強い情報屋。華奢なイケオジ。

■三好佳奈子 (みよしかなこ)

麻帆の高校時代の同級生。話題の若手美人弁護士。黒髪ショートヘア。麻帆が仕事柄弁護士が必要になるといつも頼っていた。その逆もよくあった。お互いに仲が良い。

序章

2024 年 11 月某日。新宿歌舞伎町のとあるホストクラブに麻帆はいた。ナチュラルメイクのはっきりとした目鼻立ちの顔に、ショートポニーテールの女性だ。

服装も、ブラウスに黒いジャケット、パンツスーツ、地味目のパンプス。どう見ても仕事帰りの OL にしか見えない恰好だ。

「ようこそ。麻帆さんだね。今日がホストクラブ初めてなんだって？」

派手なメイクときつめの匂いがするワックスで固めた金髪の華奢なホストの男、ハルキが話しかけてきた。

「ええ。こういうところはあまり ... 何事も経験だと思って、思い切って来ちゃいました。」

麻帆が取り繕うようにできるだけ愛想よく答えると、ハルキはまだどこことなく少年のあどけなさが残る笑顔を見せながらいった。

「すごいじゃん。じゃあ俺が麻帆さんの初めてのホストなんだね。俺はハルキ。こんな素敵な人の初めてだなんて、運命を感じるよ。」

こんな安っぽくて臭い芝居で他の女性はときめいたりするのだろうか。例の女子大生もこの程度で沼に嵌っていったのだろうか。そもそも麻帆はこの手の華奢な男性は好みではなく、彼の営業トークも全く響かなかった。

(うーん、思ったより面倒臭いかも ...)

麻帆は作り笑いを浮かべながら、心の中で悪態をついた。

事の発端は先月に遡る。大杉麻帆は都内の亡き父の探偵事務所を引き継ぎ、元警察官の探偵として着実に依頼をこなしていた。その依頼人に寄り添った対応が評判を呼び、一定の依頼が定期的に来るようになっていた。

しかし昨今の東京の地価上昇や物価高騰の煽りを受け、都内に事務所を構え続けることが徐々に苦しくなっていた。移転も考えたが、父の代から続く事務所で、大家との付き合いも古かったこともあり、何とか残る方法を模索することにしたのである。そこで始めたのが、大手興信所の下請けだ。父の代から繋がりがあある情報屋に仲介してもらい、大手興信所がリスクや

その他の事情により直接担当したがないような案件を回して貰っていた。

そして今回、とある資産家の娘の行方を捜して欲しいとの依頼が麻帆の事務所へと回されてきたのだ。

それはよくある話であった。東京の夜の街へと遊びに行くことが多くなった女子大生が、ある日そのまま帰ってこなかったのである。失踪した当日の服装や、女子大生の持ち物などから、若くしてホストクラブでの遊びに嵌ってしまったことは明らかだった。

大抵この手のケースであれば、入り浸っているホストクラブのホストの家に転がり込んでいるか、俗に言うパパの世話になっているものなので、すぐに見つかるのが常だった。

しかしこんな簡単な依頼が丸投げされてきた時点で、そう簡単にことが進まないことは覚悟しておくべきだった。麻帆は自分の見積もりの甘さを呪った。

女子大生が入り浸っていたとされるホストクラブを早々に特定した麻帆は、所属しているホスト達の身边を即座に洗った。尾行に対して全くの無警戒な上に、個人情報の廃棄に関しても全く頓着しない者ばかりだったお陰で、すぐに情報は集まった。

結果、女子大生は失踪直前までホストクラブに居たことは確かだが、ホスト達の家に移り住んでいた訳ではないということが分かった。並行して界隈の立ちんぼの情報も集めていたが、女子大生の行方は全く分からなかった。

この時点で少々面倒臭い予感がしていたところへ、案件を仲介してきた古井から連絡が入ったのだ。

「例の件だが、手を引いた方が良いかもしれない。警察への捜索願いが取り下げられたが、依頼者である家族たちは取り下げた覚えがないと言っている。嫌な予感がする。」

古井は法曹界を始め、警察内部にも情報源を持っている。そんな彼がそういうのであれば、余程危険なのだろう。

しかし、依頼人と面談した際の憔悴しきった様子を思い出すと、どうしても諦めきれなかった。麻帆はそういう性分だったのだ。古井の警告を無視して、麻帆は調査を進めた。

ところが、ここにきて一向に有力な手掛かりがつかめなくなった。他に手がかりが無ければ、もう直接ホストクラブに乗り込んでみるしかない。こうして、今に至る。

「思ったより飲みやすいのね。」

麻帆はグラスに口をつけながら言った。あれこれ理由をつけて、一番度数が少ないお酒を選んだので当然である。

「でしょ？無理なく楽しむのが一番だから。普段は仕事終わりとか、飲みに行ったりしないの？」

警察官時代であれば、どんな理由があっても職務中に飲酒などあり得なかった。しかし今は民間の探偵である。その場に馴染みながらの情報収集が目的なので、仕方がない。

「友達と時々飲むぐらいかな。こういうお店はテレビとかで見たことはあったけど ...」

麻帆はどちらかというとアルコールに強い方だった。警察官時代も、酔わせてセクハラをしようとしてきた上司と勝負をして勝ったこともあるぐらいだ。しかし今日に限って、なんだかアルコールが回るのが早い気がする。

「最初はみんなそうなんだって。でもね、ここは特別な場所なんだ。だから今日は、外の事とか忘れて、いっぱい楽しんでいてほしいな。」

少し酔ってきたせいか、華奢であどけなさが残るハルキの笑顔も可愛げがあるような気がしてきた。まだ一杯目なのに、何かおかしい。

しかしここで退くわけにはいかない。麻帆の事前の調査では、この男はホストになってから日が浅く、あまり手慣れていない。そして依頼人の娘と最後に接触していたと思われる男だ。

「ところで、ここに来る女の子たちって突然来なくなっちゃったりとか、する？」

麻帆が尋ねると、一瞬ハルキの顔から笑顔が消えた。

酔いが想像以上に早く回ってきたことで焦り、少し強引な聞き方をしてしまったかもしれない。

「えっとほら、売掛金とか、そういうので払えなくなっちゃって逃げちゃう娘とかいるんじゃないかなーって。」

麻帆は慌てて取り繕ったが、あまり上手く言葉が出てこない。考えが次第にまとまらなくなってくる。

「さぁ ... 女の子によっては結構気まぐれな子多いし、他に推し見つけたりして、急に来なくなっちゃうとかあるとは聞いているけど、俺はまだ見たことはないなあ。まだ1年目だし。」

やはりこの男、この業界に飛び込んでから日が浅いのは

間違いないようだ。明らかに動揺している。

「実は、友達の妹がここに来ていたみたいなんだけど、急に連絡がつかなくなっちゃって。友達は地方に住んでいるから、こっちに住んでいる私が代わりに探しているんだけど ...」

そういうと麻帆は女子大生の写真をハルキに見せた。ハルキはその写真を一瞥すると、少し考え込んでから答えた。

「ああ、この子か。この子なら知ってるよ。」

意外にもすんなりと答えたので、麻帆は肩透かしを食らったかのような気がした。

「本当？今どこにいるかまで知っていたりする？」

思考が上手くまとまらない。感じている違和感を深く考えずに麻帆はそのまま食い気味に尋ねてしまった。

「まだ喋れるのかよ。すごーな。でももう限界かな。」

突然ホストの態度が急変した。せせら笑う様に鼻をフンとならしながら、こちらを蔑むような笑みを浮かべて見ている。

何かがおかしい。先ほどまでのどこか少年のようなあどけなさが残る笑顔ではない。警察官時代、たった5年間だったが、嫌という程見てきた。邪悪な、人から搾取する悪人のそれだ。

「何を ...」

そう言いかけたところで、視界が歪む。

「まさか ... !」

「まさかって、知らない人から出された飲み物に色とかついていたら、簡単に飲んじゃダメって知らなかった？ヤリサーの新歓に来る大学生でもそれぐらい知っていると思うんだけど。」

どうやら飲み物に何か薬が混ざっていたらしいが、今更気づいてももう遅い。

必死で抗議の声をあげようとしたが、呂律がまわらず身体が思うように動かない。

最後まで必死に叫んでいたつもりだったが、麻帆の意識はそのまま途絶えた。

#1. 目覚め

目を覚ますと、目の前に机が見えた。どうやら椅子に座ったまま寝てしまったらしい。

頭が重く、ぼんやりする。まるで二日酔いのように思考が働かない。

(う ... 寝てた ... ? 昨日飲み過ぎたんだっけ ... ?)

そうして立ち上がろうとしたところで、手が動かないことに気づいた。

(あれ?)

そもそも腕の感覚がない。まるでしびれたかのようなのだ。

ゆっくりと周囲を見回すと、どうやらここは物置か何かのようだ。いくら飲み過ぎたとしても、こんなところで寝るような麻帆ではない。

喉が渇いたような気がしたので唾を飲み込もうと舌を動かしたことで、違和感の正体に気づいた。口が半開きなのである。口には布のようなものを固く結んだ猿ぐつわをかまされている。

それだけではない。少しだけ腕の感覚が戻ってきたことで、両手が後ろ手に縛られており、二の腕と胸のあたりにも縄が回されていることに気づいた。恐らく背もたれに縛り付けられているのだろう。

(そうか、私、薬を飲まされて ...)

徐々に記憶が戻ってくる。この状況は明らかにまずい。まさか、自分が探偵であることが初めからバレていたのだろうか。

「うー！う！」

椅子から立ち上がろうとして思わず声が出る。

カタカタという軽い金属音から、恐らくパイプ椅子に縛り付けられているのだろうということが分かる。足首を縛られているので歩くことは叶わないが、何とか立ち上がることはできた。

(このまま動き回るのは無理ね。まずは何とか抜け出さないと ...)

麻帆はもう一度座り直すと、縄から抜け出せないかもがき始めた。

猿轡越しに小さな呻き声をあげながら、手首の縄を解こうと腕を動かすと、少しだけ遊びがある気がした。

(これならそのうち解けそう ...)

後ろ手に縛られた腕を交互に動かし続けていると、縄と縄の間に少しずつ緩みが出てくる。そのままのペースで格闘していると何とか結び目まで指が届き、手首の縄を解くことができた。

手が自由になれば後は簡単である。パイプ椅子に身体を縛り付けている縄も、もがいていた影響で緩んでいたので簡単に解けた。足を縛る縄は滅茶苦茶に巻き付けてあったので少し苦労したが、すぐに麻帆は自由になった。

最後に猿轡を外すと、大きくため息をついた。

「ふう」

改めて物置の中を見回す。ここはどこだろうか。金属製の扉の向こうにも人の気配はしない。逃げるなら今のうちかもしれない。

机の上に無造作に置かれていた自分のジャケットを羽織り、

恐る恐る扉に手をかけてドアノブを回すと、鍵もかかっておらずあっさりと開いた。外は薄暗い階段が上に続いている。窓もなかったことから、恐らくビルの地下だろうか。

足音を立てないようにゆっくりと階段を上り始めると、非常灯が見えてきた。どうやらすぐに出られそうだ。階段はさらに上へと続いているが、恐らくここが地上階の扉だろう。

非常扉に手をかけようとしたところ、なんと向こうから勝手に開いた。

扉の向こうには男が3人見える。

「ん？おい、なんだこいつは。縛っておけと言っただろう。」

ツーブロックに浅黒い肌、高級スーツに身を包んだ男が、不機嫌そうに吐き捨てた。

「あっ ... さーせん、ちゃんとやったんすけど。」

暗くてよく見えないがあの中のホストの声が聞こえた。

「できてねえじゃん！じゃあこれなんだよ！」

男はそう怒鳴ると、素早く麻帆に掴みかかってきた。

麻帆は躲そうとしたが、右腕を掴まれてしまった。

即座に相手の手のひらに腕を軽く押しあてると、体幹を乗せて全身で素早く下がる。すると、あっさり振りほどくことができた。警察官時代必死で身に着けた護身術の賜物である。そのままの勢いで、非常扉の外へ向かわず上に続く階段を駆け上がり始めた。

「チッ。手間かけさせやがって。あれあつただろ。貸せ。」

ツブロックの男が後ろにいる男たちに何かを指示しているのを尻目に、麻帆はぼんやりする頭で必死に考えながら階段を駆け上がった。

正面から強引に突破するのは難しそうだ。地下は行き止まりだし、2階程度の高さなら飛び降りれば何とかなる... そう思って駆け上がった麻帆だったが、その期待はすぐに打ち碎かれた。

「ウソでしょ!？」

管理が杜撰な雑居ビルなのだろうか。非常灯があるという

ことは恐らく避難ルートのはずなのだが、2階の非常扉の前には段ボールが積み上げられていてすぐに開けることがかなわなかった。

それどころか、3階へと続く階段も、椅子やら机やら様々なものが積まれており登れそうにない。

慌てて後ろを振り返ると、目の前にはもうツブブロックの男が迫っていた。そして丁度麻帆の首筋に何かを当てようとするところだった。

バチンという音と共に激痛が走って身体の力が抜けると、ツブブロックの男は脱力した麻帆を右腕で抱きとめそのまま胸をまさぐった。

「お、結構あるじゃん。顔も悪くないし ... アネさんの注文じゃなかったら味見したんだが。」

まるで玩具の様に乱暴に胸を揉まれて、麻帆は痛みと悔しさで顔をしかめた。

「ったくよお、そんな顔すんなよ。おい、地井！お前が手本を見せてやれ。」

そのまま男は麻帆を担ぐと、地下へと降りて行った。

再び物置へ連れ戻されると、先ほどのホストの男と地井と呼ばれていたメガネをかけた男が待っていた。

脱力した麻帆のジャケットを脱がせて机の上うつ伏せに押さえつけると、地井が手際よく麻帆の身体に縄を回し、高手小手で縛り始めた。

「ぐっ、この、放せ！ひゃっ！」

力が入らないまでも身体を振って抵抗する麻帆をツーブロックの男が左手で上半身を押さえつけながら、右手で麻帆の臀部を叩いたり揉んだりして弄んだ。

「いいケツしてんじゃん。」

どこまでも小馬鹿にした態度で弄ばれ、麻帆は心底頭に来ていた。引っ掻くぐらいしてやろうともがいたが、驚く程手際よく縛られていたので既に手も動かせなくなっていた。

力が入らない身体を必死に動かしたところで、縄が擦れるギシギシという音に加えて、締め付けられた身体が痛むだけに終わった。

「ふざけんな、このエロジジイ！こんなことして今どきバレないとも思っているの？！」

精一杯声を張り上げたつもりだったが、物置の中に籠った怒声が響くだけで、外まで聞こえたとは思えなかった。

「あ？オレはまだジジイって歳じゃねえよ。おい、早くこの煩い口を塞げ。」

ツブロックの男がイライラしながら地井を急かすと、地井は麻帆の鼻を摘まんできた。突然鼻をつままれたことで息が吸えなくなった麻帆が慌てて口を開いたところへ、丸めた布を押し込まれた。

「ガッ！ヴァ！」

急いで吐き出そうとするが、それよりも早くゴムボールのようなものを上から押し込まれ、ボールについたベルトを頭の後ろで締め上げられた。

「ヴァー！ヴァー！」

麻帆は必死で抗議の声を上げながら暴れたが、地井は気に留める様子もなくベルトの留め具を通して固定した。

「さて次は ... おっと！」

身体感覚が戻ってきたので、麻帆は縛られた身体を器用に捻り、上半身を軽く押さえつけていた男の手から逃れて起き上がった。

そしてまだ拘束が施されていない足を振り上げ、地井を蹴り飛ばそうとした。しかし縛られていると身体バランス感覚が狂うのか、思った通りの場所へ蹴りは届かず地井は身体を仰け反らせて躲してしまった。

「すげえな、もう動けるのか ... あー、もう一発行っとくか。」

ツーブロックの男がそういうや否や、再び首筋に何かを押しかけてバチンという音と共に激痛が走った。

「オゴッ！」

麻帆は声にならない悲鳴を挙げたが、ボールギャグによってその声は完全に阻まれてしまった。恐らくスタンガンだろうか、再び麻帆の身体に力が入らなくなった。

「手間かけさせやがって。まあたまにはこれぐらい活きが良いのも居たっていいよなあ。」

ツブブロックの男はへらへら笑いながら、再び麻帆の臀部をペチペチと叩くと、ネットリと撫でまわす。麻帆が不快感で顔をしかめたのを確認すると、仕上げとばかりにパチンと強めに叩いた。

「ムウ！」

突然強くお尻を叩かれたことで、麻帆は思わず声を挙げてしまった。

「ん？お前素質あるんじゃない？じゃじゃ馬女が実はドMでしたとか最高じゃねえか。」

ツブブロックの男に徹頭徹尾馬鹿にされた挙句、勝手に自分の性的趣向まで決めつけられて、麻帆は悔しさと恥ずかしさで顔が熱くなるような感覚を覚えた。

すると今度は地井が麻帆のパンツスーツのベルトを外して脱がし始めた。

(まさか ... ! このまま?!)

こういう状況になった以上覚悟してはいたが、実際にやられそうになるとやはりショックであった。

少しでも動きやすくと考え、パンツスーツの下はスポーツ用のボクサーショーツを履いていた。

「あー、もうちょっと色気があるのを期待していたんだが ...」

ツブブロックの男がため息交じりに言うと、地井がやや上ずるような高めの声で早口に答えた。

「轡田さん、これはこれでエロいんですよ。今日はそういうの予定してなかったところとか、スタイル気にして身体鍛えますとか、そういう想像を掻き立てるのが良いんですよ。」

「確かに、このケツは本気で鍛えた女じゃないとあり得ないもんな。最近の女は尻がだらしないの多いからなあ ... まあ熟女とかだとだらしない方が良いんだが。偉いぞー、よしよし。」

そういうとツブブロックの男、轡田は再び麻帆の臀部を撫で、最後にギュッと鷲掴みにしてから放した。

本人そっちのけで人の尻を品定めしながら好き放題弄ばれ、ひたすら惨めだった。

このまま犯されるのかと覚悟していたが、どうやら違うらしい。地井が取り出した縄をなにやらゴソゴソと弄っている。

「おい、矢部。よく見て覚えておけよ、いつか役立つかもしれないから。ほら、そっちの足抑えろ。」

「っす。」

轡田がホストの男にそう言いながら、地井の方を見た。机に押さえつけられた麻帆からはよく見えなかったが、地井はどうやら股縄をかけようとしているようだ。

そのまま麻帆の腰骨のやや上の周りに合わせて縄を巻き付けると、今度はショーツの上から股間の形状を確かめるかのように執拗に触ってきた。犯される覚悟をしていたものの、予想外の出来事に不快感から声が出る。

「ウウッ！ムー！（どこ触っているのよ！）」

地井は下着の上から麻帆の敏感な突起を探り当てると、クニクニと優しく刺激してきた。決して気持ちよくはなかったが、直接的な刺激により徐々にその突起は固く屹立していく。

続いて割れ目のひだの形を確かめるように、人差し指と薬指

で両側をなぞり、軽く押し広げる。そして中指で固くなった突起を軽く小突いた後、割れ目の中心を数回往復してきた。

(気持ち悪い触り方して ... 最悪！)

アダルトビデオなどであればここで喘ぎ声をあげるのだろうが、現実はそうはいかない。ただただひたすら不快なだけである。

最後に想定外だったのは、麻帆の後ろの穴、排泄孔の位置を確認すると、その形と大きさを確かめるかの如く、ねっとりと穴のふちに指を沿わせて撫でてきたことだ。

余りの気持ち悪さに背筋がゾクゾクとするような感覚を覚えた。

「グ、グゥ」

(気持ち悪っ！そんなところ触るんじゃない！)

くぐもった呻き声をあげて全力で暴れながら抗議したが、男3人に抑え込まれた状態では全く意味のないことだった。

「こんなもんか ... よし、大体位置は分かった。」

地井がボソりと呟くと縄に少し大きめのコブを作っていた。1つコブを作るとに、敏感な突起、秘裂の真ん中、そして後ろの穴に器用に位置を合わせ、そのまま股縄をきつめに締め上げた。

「これでよし。ほら、起きろ。」

轡田がそう言って麻帆の身体を縛る縄尻を掴んで引き起こすと、すぐにその股縄の効果を思い知ることになった。

「んうウ！」

先ほどの刺激で軽く勃起してしまっていた股間にある敏感な突起を的確に捕えた縄のコブが、体制を変えた瞬間絶妙な加減で擦り上げた。それと連動するかのように、麻帆の秘裂と後ろの穴に食い込むコブも、その存在を強く主張している。

(なに ... これ ... ヤバい ... かも ...)

鈍く甘ったるいようなくすぐったいような、何とも言えない、明らかに無視できない感覚が、完全に麻帆の股間を支配してしまっていた。不意に体勢を変えたり動こうとする度に、絶妙に配置されたコブが敏感な部位を連携して責め立てるようになっていた。

「お、流れ変わったな。フヒヒ。」

地井は麻帆の臀部を勝ち誇ったような顔をしながら揉んだ。地井が指を食い込ませるたびに股縄の位置が微妙にずれ、その都度麻帆の身体が反応してしまった。

「ウ！ウッ！ウウ ... ンウ！」

決して快楽とは言えないものの我慢しようとすればするほど意識してしまう、そんな悪辣な拘束だった。これのせいで、下半身だけでなく上半身の縄を解こうと体勢を変えることすら困難になった。

その様子を轡田と地井は蔑むような眼差しで見ながらニタニタと満足そうに笑っている。

「おお ... マジっすかこれ。演技とかじゃないんすか？」

そう言うと矢部は麻帆の股縄の端を強めに引っ張った。

「ヴ！」

突然強く締めつけられたことで想像以上に強く刺激され、特に突起の部分に痛みと変わらない感覚が走った。

「おいおい、可哀想だろ？もう少し優しくしてやれよ。女の子だぞ？」

轡田がニヤニヤと笑いながら、上半身を戒める縄で強調するように括りだされた麻帆の胸を少し強めに揉みしだいた。

「ウッ！フーッ！フーッ！」

決して感じている訳ではなく、強めに揉まれたことで肺が圧迫されて息が荒くなっただけである。しかし傍から見れば完全に発情スイッチの入った雌の喘ぎ声と区別がつかなかった。

轡田の手の中で無様に形を変える自分の胸を見ていると、こんな理不尽な扱いを受けている自分がとても惨めに思えてきた。麻帆は気が滅入りそうになりながらも轡田を睨み返した。

「お、まだまだ余裕そうじゃん。じゃ、今からドライブするから、車までちょっと散歩してみようか？」

轡田がそういうと、地井と矢部はトレンチコートとマスクを持ってきて麻帆に着せ始めた。そして最後にベレー帽とサングラスをかけると、傍から見ればちょっと寒がりな女性が

顔を隠しているだけにしか見えない恰好になった。

これなら誰が見ても、猿轡を嚙まされ緊縛された女性だとは思えない。

(まさかこのまま外に連れ出すつもり ... ? でもチャンスかもしれない ...)

麻帆はひとまず大人しく彼らに従い外へと出ることにした。